

琉球大学学術リポジトリ

冠船芸能で上演された組踊の基礎的研究：
演戯故事と組踊台本との内容比較を中心に

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 我部, 大和 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/40994 |

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

冠船芸能で上演された組踊の基礎的研究
—演戯故事と組踊台本との内容比較を中心に—

琉球大学大学院
人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

学生番号

氏 名 我部 大和

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

本論では、那覇市歴史博物館で閲覧可能となっている演戯故事4冊に所収されている組踊12番のうち、組踊台本が現存している11番（二童敵討、大川敵討、伏山敵討、大城崩、義臣物語、孝行の巻、雪払い、銘苺子、女物狂、花売の縁、手水の縁）を対象に演戯故事の漢文訳と組踊台本の詞章との比較を行う。これらの内容比較と各作品の検討より首里王府は中国から来琉した冊封使に対し、冠船芸能で供された組踊を通じて何を伝えようとしたのか。次に記述比較の異同から、琉球王国時代の史料や儒教思想にかかわる文献などを駆使し、歴史的背景や思想的背景から冠船芸能における組踊を検討する。他にも王府は冊封使に対し組踊を観劇させるだけでなく、外交儀礼の場で演じられる組踊で中国から伝播した儒教を「恭順」に受け入れる様子をどのように伝えようとしたのかを検証した。

前述した演戯故事・組踊台本の異同による考察と検討から、まず演戯故事では、冒頭の漢文訳で組踊における前段の内容が記される。組踊では「忠臣」対「逆臣」という仇討や琉球における災害や社会問題があったのを創作している。それにより、結末として首尾良く仇を討つあるいは儒教の主君に対する「忠」あるいは親への「孝」、子に対する「慈」などが見出すことを冊封使に印象づけることができた。それにより、王府は冠船芸能の場で儒教が琉球に受容されていることを冊封使に印象づけたといえよう。

次に、演戯故事では組踊台本で歌われる歌に関する漢文訳が略述あるいは大意が漢文訳されている。組踊台本での歌は登場人物の心情や道行きの様子、踊りをする際に用いられる。そのため、舞台における地謡の聴かせどころであり、踊りの見せどころである。

したがって、王府は冊封使に対して舞台上に注目してもらうよう歌の聴かせどころや踊りの見せどころに配慮しながら、儒教倫理を印象づけながら観劇させたのであろう。